

■ 専門科目

アート・クリエイション

比較芸術論

後期・選択・2単位

Comparative Study on Arts and Design

担当教員 藤田治彦、尹智博、藤山哲朗

到達目標（目的含む）

さまざまな芸術の相違と共通性、狭義の芸術と広義の芸術との関係等について考察し、各種芸術の適切な比較、独自の比較を行い、芸術全体の知識を広げ、各自が専門とする芸術制作と芸術論を高めることが目標である。

授業の概要

比較芸術論では、絵画、彫刻、建築、各種工芸、プロダクト・インテリア・ファッション等を含む各種のデザイン、マンガやアニメ、映像、音楽、舞踊からスポーツの一部まで、広義の芸術の比較講義を行う。

授業計画

- 1：芸術とスポーツ（芸術学関連学会連合シンポジウム）[藤田]
- 2：絵画・彫刻・建築教育の変遷（素描アカデミーからヴァフテマスまで）[藤田]
- 3：風景画（太陽と月を描いた東西の画家たち）[藤田]
- 4：工芸（合同芸術 The Combined Arts と Arts and Crafts 運動）[藤田]
- 5：デザイン（家具製作から建築施工まで）[藤田]
- 6：アートの空間（インスタレーション）[藤山]
- 7：絵としての建築（アンビルトアーキテクチャー）[藤山]
- 8：言葉と空間 [藤山]
- 9：ダンスの空間／建築の空間 [藤山]
- 10：ファッション／アート／建築 [藤山]
- 11：記録（投影法と記譜）[尹]
- 12：音（楽音と雑音）[尹]
- 13：音（楽器と音具）[尹]
- 14：アート（音楽と芸術）[尹]
- 15：アート（音楽と舞踊）[尹]

授業時間外学習

毎回さまざまな芸術についての講義が行われるので、その前後に、情報図書館やウェブサイトなどで、その関連内容を調べておくことが有意義である。

評価方法

担当教員が毎回課すレポートをもとに評価する。授業参加（レポート提出）回数は、全体の3分の2以上の出席（提出）を確認し、評価対象とする。

使用テキスト

使用テキスト等については、5回ずつ担当の3名の教員が、それぞれ最初の授業の日に連絡する。

芸術共創論

2022年度開講・選択・2単位

Co-creation for Arts

担当教員 谷口文保、曾和具之、山本忠宏

到達目標（目的含む）

共創の芸術的価値について俯瞰的に考え、その可能性を理解する。受講生各自が自身の研究を俯瞰的に再考し、その意義を明確化する。

授業の概要

本授業では、未来を拓くアーティストやデザイナーに必要な俯瞰的視点と柔軟な思考力を身につけるために、近現代の芸術の相対化を試みる。まずは、共創の観点から近現代の芸術について再考する。次に、美術館や町中で芸術の実態調査を目的にフィールドワークを行う。こうした学習と調査に基づいて、芸術の多様性と可能性についてディスカッションする。最後に、各自が自分の研究の価値や意義を再確認し、その内容をプレゼンテーションする。

授業計画

- 1：イントロダクション「共創とな何か？」（谷口）
- 2：芸術の相対化（谷口）
- 3：デザインにおける共創（曾和）
- 4：メディア表現における共創（山本）
- 5：アートにおける共創（谷口）
- 6：フィールドワーク 大阪市立東洋陶磁美術館（集中、谷口）
- 7：フィールドワーク 千日前道具屋筋商店街（集中、谷口）
- 8：フィールドワーク 国立国際美術館（集中、谷口）
- 9：フィールドワーク 日本橋電気街（集中、谷口）
- 10：ディスカッション（谷口）
- 11：各自の研究の意義について（谷口）
- 12：プレゼンテーション（準備）（谷口）
- 13：プレゼンテーション（練習）（谷口）
- 14：プレゼンテーション（講評）（全員）
- 15：まとめ（谷口）

授業時間外学習

授業の前後に、参考図書を読むと授業内容が深く理解できる。授業後に、地域で実施されているアートプロジェクトや芸術祭を見学したり、地域連携や共同制作による芸術活動に参加したりすると授業内容をより深く理解できる。

評価方法

プレゼンテーション50%、レポート20%、授業態度30%の割合で評価する。プレゼンテーションを公表しなかった場合、またはレポートを提出しなかった場合、または出席が10回に満たない場合はD評価となる。

課題・試験に対するフィードバックの方法

個々のプレゼンテーションに対して講評を行う。

使用テキスト

鶴見俊介「限界芸術論」（筑摩書房、1999）

参考テキスト・URL

赤瀬川源平「超芸術トマソン」（筑摩書房、1987）

赤瀬川源平他編「路上観察学入門」（筑摩書房、1993）

今和二郎「考現学入門」（筑摩書房、1987）

谷口文保「アートプロジェクトの可能性 芸術創造と公共政策の共創」（九州大学出版会、2019）

熊倉純子監修「アートプロジェクト芸術と共創する社会」（水曜社、2014）

各自準備物

授業中に指示する

実習費

フィールドワークのための交通費

環境アートプログラム

2022年度開講・選択・2単位

Environmental Arts Program

担当教員 戸矢崎満雄、かわいひろゆき、さくまはな

到達目標（目的含む）

環境（時代性と地域性）を基にしたアートとプロジェクトについて体験的に理解し、芸術的アプローチによる環境アートの課題と可能性について理解できる。

授業の概要

現代アートは「時代や場所」を踏まえた環境を捉えることが重要なので、国際的な芸術祭やアートプロジェクトの事例を中心に考える。本授業では、日本の伝統文化や社会状況などを起点にしたアートのアプローチを体験や見学も含めて学ぶ。

授業計画

- 1：イントロダクション「環境とアート」
- 2：インスタレーションと茶の文化（集中）
- 3：現代アートと茶会（集中）
- 4：地域文化とアートギャラリー（集中）
- 5：住空間とインスタレーション（集中）
- 6：現代アートと伝統文化（集中）
- 7：芸術祭とアートプロジェクト（集中）
- 8：サイトスペシフィックなアート（集中）
- 9：街おこしとアートの役割（集中）
- 10：アートとワークショップ（集中）
- 11：異文化とワークショップ（集中）
- 12：ワークショップの発表（集中）
- 13：現代アートと盆栽（集中）
- 14：盆栽アートのワークショップ（集中）
- 15：「見立て」と盆栽アート（集中）

授業時間外学習

テーマに添った課題では一部に授業時間外の制作がある。特に興味を持ったものに対しては、各自に詳しく調べるなどが重要。

評価方法

授業内で書くレポートやワークショップによる制作物を60%、授業への積極的な取り組みを40%で評価する。

課題・試験に対するフィードバックの方法

授業中でのレポート発表とワークショップでの制作発表などでは個々に講評を行う。

使用テキスト

受講者に「ザ・トップ・フロアー」（2006年）と「沙弥島アートプロジェクト」（2016年）を無料で、他に適時資料を配布する。

参考テキスト・URL

神戸芸術工科大学紀要2013「瀬戸内国際芸術祭 沙弥島アートプロジェクト by 神戸芸術工科大学」報告

各自準備物

事前の授業中に指示するか掲示する。

実習費

見学での交通費は各自負担となる。

現代クラフトプログラム

前期・選択・2単位

Modern Crafts Program

担当教員 森岡希世子、野口正孝、友定聖雄、田口史樹、
徂徠友香子

対面・遠隔の別

対面授業

到達目標（目的含む）

工芸における伝統とは何か、それは現在の工芸にどのように受け継がれ影響を与えているのかを、体験的に理解する。

授業の概要

工芸の様々な分野において、伝統として伝わる技術や様式を学ぶため、産地のフィールドワークを行う。さらにその伝統を基礎として、現在行われている革新的な技法や新たな挑戦などを、実際に工芸に携わる方々の聞き取りや、調査学習などを行い検証する。そこから今後の工芸の可能性を考える。

授業計画

- 1：オリエンテーション 授業概要・課題説明（森岡）
- 2：工芸における伝統と革新とは（森岡）
- 3：丹波焼 現地調査①（森岡）
- 4：丹波焼 現地調査②（森岡）
- 5：丹波焼の現在（森岡）
- 6：日本現代工芸美術展①（友定）
- 7：日本現代工芸美術展②（友定）
- 8：現代工芸とは（友定）
- 9：大阪造幣局 現地調査①（田口）
- 10：大阪造幣局 現地調査②（田口）
- 11：金属工芸の現在（田口）
- 12：播州織 現地調査①（野口）
- 13：播州織 現地調査②（野口）
- 14：播州織の現在（野口）
- 15：課題の総合講評会（森岡）

授業時間外学習

現地調査当日の概要・ポイント等をレポート等にまとめるなど、復習に励むこと。

評価方法

①現地調査への参加 ②陶芸・ガラス・金属・テキスタイルの各演習ごとのレポートの内容を総合的に評価する。

使用テキスト

適宜配布する

各自準備物

現地調査において、デジカメ、記録紙など

実習費

現地調査に必要な交通費